特42
951

くぶたいの兩人是とそうし見て取りにゞせしのと息込ゝを久吉こりゃとせいして見込ゝをよろしく幕のまゝ引付るとドロ〳〵みて印をやとき思入是をとである鳴物お成ア六法をふり向ふへは入る後ジャキリ

四幕目大佛前妾宅の場ふたひ常足の貳重上手障子家体いつもの所門ト口都てお瀧妾宅のもよう爰へ五右衛門ゞ留守を幸ひに醫者森如軒お瀧に心をのゝいやふしきせりふ有てかれゞ心にそたりとすゞ五右衛門のそゝんをそるとのつびきさせぬ詞づめいのゞいせんと思ふ所へ五右衛門の先妻おりつ悴五郎市三仁五郎兵衛三人にて出て來り是悲五右衛門にあいたいといふ此時奥より涙人十内實ゝ五右衛門好ミの形りにて出て來りせりふ有ッて五郎兵衛ゝ娘のおりつを改めて去り狀を貰ひさいといふおりつゝ五右衛門ゝ向ひ是迄の恨ミのせりふをいふ五郎市もせりふ有ッて五郎兵衛ハト、五右衛門に去り狀をのゝせ思入有て向ふへゝ入るおりつゝ殘り愁ひのこゝし有てそゞりなげくミるく奥へは入る時の鐘向ふより小鮒の源五郎實ゝ岩木當馬の丞にて主家の實詮義の爲姿をやつ〳〵五右衛門ご手下とあり入り込ミお瀧と顔見合胸くりそぎし八幡の里にてを瀧と深かく契りし事を

大塚廣盛
中村傳五郎
大内藏長成
助高屋高助
八鈎勘解由
坂東彦十郎
なるせ
坂東尋若

ろたりお瀧も實い明智家の息女皐月姫よて五右衛門ゞ爲よい主家もへ妾と偽りかくまへおき主家再興の時節をはゝると此せりふの内三仁五郎兵衛ゞそよんゐよつて久吉の其等とりまくと聞源五郎の當馬い本心をあのしおぼつよ五郎市をつれさせそこしもばやく此場を落ろとそゐ〳〵をおとしやるせ〳〵ふにて淺黄まく振り冠せる東寺朱雀町の場舞臺正面奥深に在体雪降りの遠見爰へ石川五右衛門大せゐの捕手を追回し出て來り面白き捕物の立回り有て皆々を追込そこなし有る爰へ夜蕎麥賣實い仙石權兵衛姿をやつし荷をおつき出て來る五右衛門是を見て湯を一ッくれろといふそばや心得てどんぶりへ蕎麥湯を吸ふさし出す何心おくとふんとそる所を十手を出しトッタト懸る五衛門胸くり一寸立回り有ッて蕎麥や引ぬくとなれん付四天に成り兩人立回り雪よこゞへるこゐしよろしく有ッて又大せいの捕手にとげしき立回り召捕る件にて幕中幕

高賀實大入藏

檜垣茶屋の場ぶさい一面の筋塀上そよりに九尺貳拾の家根付白木造りの門とふ金物蹴込のに石段書割下モ手いつもの出茶屋店貳きやく並ふべ爰に仕丁六人酒盛をしている見得そふんにて慕明く時に御主人大内藏さまがおとさの能狂言て大せいれお客ゞがお出被成被成るといふ筋をたつてと入る賑やこのお鳴物よ成り向ふより鬼次郎半合羽旅形り菅笠を持跡よりお京同ゞく旅形りにて出て來り花道に留り向ふよ見得るゞ院の御所笛たいこの聞こもるハ御能の最中と見得る幸ひなるあれなる茶店そばーつかれをとぶたいへ來り店へ腰をゝゝる茶亭與市茶を吸んて出て白川より水を吸んで是迄はこび升るもへ檜垣と名をつゝられ由緒ある茶の出花を一ッを上り被成ませ鬼次郎お京も茶を呑こ平家ハ日々に榮へ源氏いをもれ木と愁ひのこゐー是より與市能狂言のせりふ有つて水を吸そよは入る鬼次郎こゐー有てを能をいり次第歸りを持受館へ入り迄む手立と夫婦そめーゐわせ小がくれする音樂に成り門を開ふゝせ大内藏卿狩衣さー拔にて出て來り此跡より腰元六人仕丁十六人付添出るお京與中へ出て御願ひで御坐り升ると此時門の内にてそゐの者まちやと聲をかけ鳴瀬うちかけいせうにて出て來りそれゐるいお京どのゐお京も顔を見て鳴瀬さまの先ッハ御無事でとたゞいにあいさつあつて鳴瀬大内藏に向ひ是ゐるお京ハ女藝者の狂言師御目見得の義を願ふ何んゐりと狂言を所望ドやく〳〵と是より唄よ成りお京舞扇を持ふり有る此内大内藏ハそドうお京ゞ舞にうつ〳〵をぬのしよねんなき体ふり有ッく

京屋食兵衛
中村鼠雀

香具屋弥兵衛
助高屋高助

下ぶくの七入
与平次
坂東彦十郎

丹波屋於喜
尾上多賀之丞

てうべえ丑松
中村傳五郎

納る太郎冠者のお京いあるのヤイハア、をん前にい次郎冠者の鳴瀬いあるのヤイハア、をん前に候こりや両人とも出のしをつたナアと床の上るりに成り大内藏先に鳴瀬お京腰元仕丁をあ〳〵花道へ懸る茶店より鬼次郎伺ひ出て思ひづ大内藏と顔見合せ双方こなしよろしく幕引付ると賑やかな唄入りの鳴物よ成り大内藏先よ皆〳〵付て向ふへは入る六幕目大内藏館の場四間通しの武重正面金襖壁ぐるぐち大欄間へ惣簾を卸し爰に腰元六人居並び琴唄よて幕明く腰元皆〳〵御前さまいお能好き此間お抱へあそばした御犯言師のお京どのをお相手よあけてもくれても犯言舞といふせりふ有ッて此時勘ケ由出仕と呼び席の舞よ成り八釵勘ケ由いせう上下丹て出て来り御主人大内藏卿よいお居間よござるハテ又犯言の相手をせねばあふぬうこまつさものざと上手へと入る直よ床の上るりよ成り鳴瀬お京出て来り犯言の相手をそるといふせりふ有る爰へ廣盛公お入と呼び此由御前へヤ上んと両人奥へと入る向ふより大椽廣盛ゑぼし大紋ゑて出て来り是ゑて奥より勘ケ由犯言師の拵ふへゑて出廣盛公ゑいよくころ入來先ッ〳〵是へおん身いうわつさ形りでおいやるナされば主人の大馬鹿者脇師にゑれといせうを着せのへ今奥ハ犯言最中是より常盤御前の事どもせりふ有て只何事もおんさつ〳〵と床に成り奥ゑ大内藏卿先に鳴瀬腰元付て出て来りあぼゝのせりふ有ッて能狂言のうつぼ猿を舞ふといふせりふ有ッてどん能を巻御ス此外へ腰元六人出てせりふ有ッて上手へは入る件のどん能を巻あゑる能舞臺の形りはふ付都て本行にて正面長唄はやし連中居並び爰よ大内藏うつぼ大名の拵ふへ勘ケ由脇師の形りにてうつぼを待両人ふり有ッて納る爰へ子役のぬいくるをの猿出て来り両人せりふ有ッて廣盛猿引能せうぞくにて出てふり有ッて三人よろしく納るゑドろ幕振冠せる此外へ仕丁出てせりふ有ッて引込む切ッて落ス一面の筋塀の道具向ふゑ鬼次郎黒ニ羽重着付織物のゑさん大小にて出て来り礫を打是よてを京出て来り両人い、ゑわせのせりふ有ていふよや及ぶ女房案内奥殿さしてと床の上るりよて忍び入る此道具引てとる四間通シ高貳重高欄付壁がまちたもき欄間正面金張のうとう口上手よ揚弓の的を飾り此道具へ一面の御簾をりけ床の追り返しよて道具納る爰へ鬼次郎お京両人出て来り此時御簾を巻きゑゑる内に常盤御前十二一重緋の袴にて揚弓の弓を持たれしやとふし矢とせりふ此時鬼次郎ッか〳〵と貳重へ上り弓を取てさんこに常磐を打ち吉岡鬼次郎よも見ゑれ

いもそなんがお是より異見のせりふ常磐も心中をあらしたがいよよろこぶ爰へ奥より勘ケ由出て來る此通り清盛公へ注進せんと欠出る此時御簾の内より勘ケ面ゲ片先を切り下げる何者あらんと皆ゝおやしむ間おどろく事あられと聲をかけ正面の御簾をあゆる爰に大内藏鎧下大口附太刀長刀を持立身是を見てゞあゝいつと敬ふ是より清盛を討んとつくりあやふにていたる事物語り有つて彼唐土の會稽山耻をすゝぎし越王のためしを見よといせんかぢりし長成卿勇々しきおふせに鳴瀬い夫トの差添ぬき調へ突立れいをあく〳〵おどろきかいやうあす悪事にゞざんの夫トを恥しせりふ有つて大内藏ハ源家の重寶友切丸清盛ふのくこんもふせしもへとれひそかにうばいとり源氏へ戻さん此名劔牛若丸へ手渡しせよ鬼次郎よろこびをしいたゞき一すうごき有つていせんの勘ケ由起上りその名劔をと見る大内藏長刀にて引よせこら悪非道のむくいハ目前と勘ケ由の首を名劔よて切り清盛を斬くして見せよと切先につらぬきさし出し目出度とのうていく〳〵笑ひにて幕第二ばん目狂言涙花の住吉を江戸富ケ岡に書ゝへて艶千種浮名の瑳序幕深川八幡鳥居先の場ぶたい正面八幡の鳥居先より社前を見たる書心遠見上手風雅なる板塀興中三尺ののれん

欠

MISSING

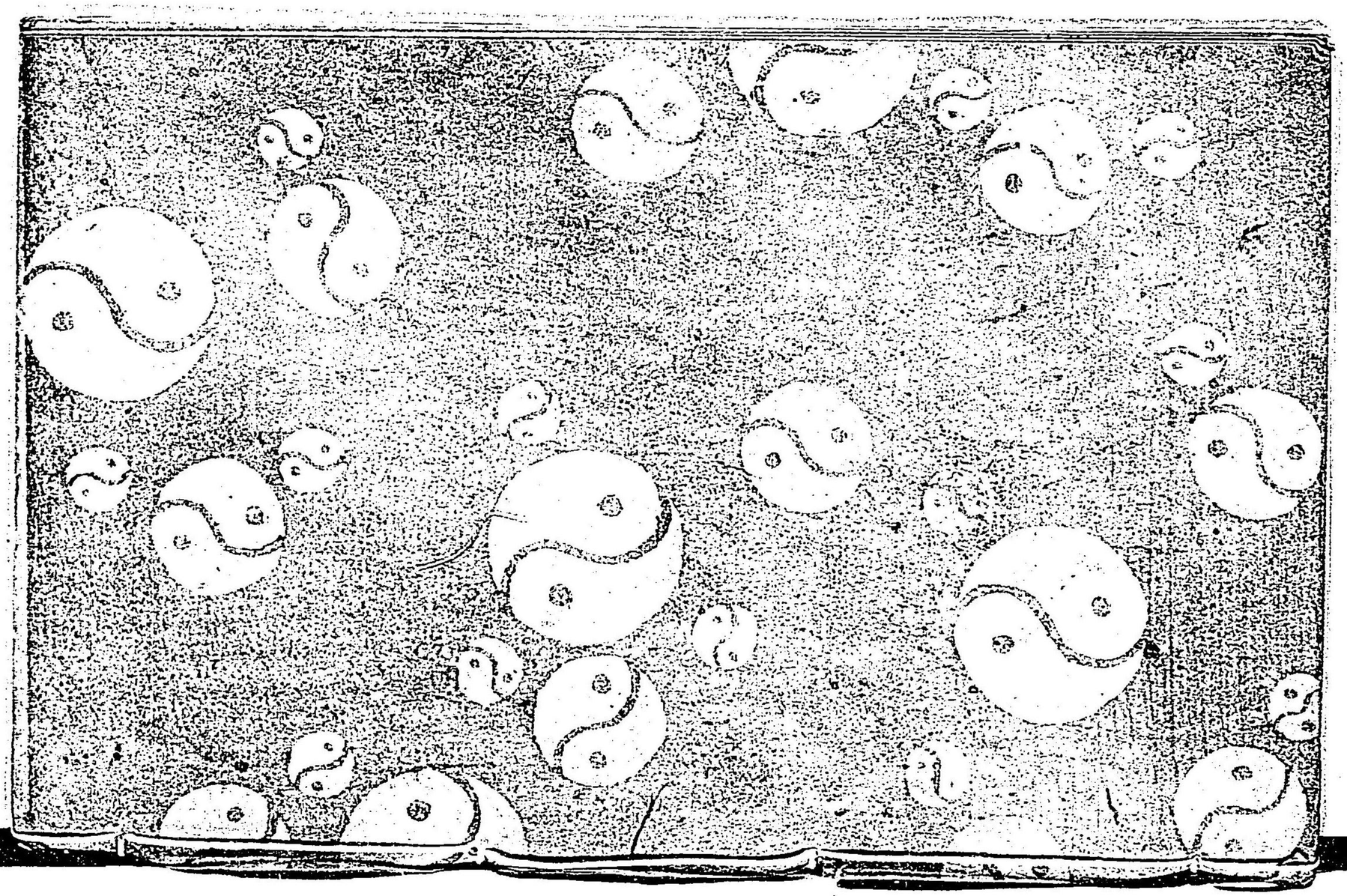
是へ御待合と印下モ手芳津張り出茶屋大拍子よて幕明く爰へ思〳〵の仕出出てし東西へと入る唄ゐ成り向ふゐ藝者若野出の形りよて此跡より岩田屋お繁茶屋女房好ミの拵らへつゝいてお岸箱廻し藤七出て來り花道に留り八郎兵衛さんが定めしまつて〻ゝんせうといふせりふ有りて皆〳〵ぶさいへ來り店へ腰をかゞるやはり有の唄にて向ふより助三郎かさびら薄羽織日傘をさし此跡より八郎兵衛大店向手代の拵らへにて同ドく日傘をさし出來り花道よ留り夕遏若野が文みをよこし八幡さゐおまつていると云せりふ有ッて兩人ともぶたいへ來り八郎兵衛助三郎よ異見をいふおまつゐわが身はなり行きを助三郎よはなし此人數上手の待合と下モ手の出茶やへと入る向ふより古手屋請入坊主のつら十德よて出來り花道にてせりふ有ッて下モ手へ忍ぶ向ふ揚幕内にてもるしてくれろ〳〵と唄に成り井筒屋太吉息子の拵らへにて先に立此跡ゐ鉄壁の丑松金若切り勝の胴ぐらを取出來りゐり音ア此近所よ見あれぬつら付だが此息子どの〻紙入をなゝさに違いねへサア出せときびしくせめる是にて紙入を出ーて逃ゐては入る太吉とりあゐ中を改め禮をいつて行に懸る丑松呼びとめれをーて行ゐといふ太吉わさせいんうら

矢島戈兵衛
市川九藏
けいやとの
坂東吾妻

古手屋八郎兵衛
中村翫雀
助高屋高助
沓見屋弥兵衛
尾上多賀之丞
市川海老蔵妻

おれとヤしてお升る馬鹿をいへ口でいふれドやァねへと太吉が懐ろへ入れ一紙入より金をのこらず出してこりやァ多分の御禮にわづがり添ふいといふもへ太吉胸よわきれし思いりせりふ有ッて下モ手へは入る此休を請人伺ひ入て、むくやるナといわれて胸よわりヤァがふくゝの四郎吉ドヤァねへゝい、所でわつゝと兩人店へ腰をのゝる向ふより梶岡文藏黒の羽織大小にて此跡ゞ角助中間の拵ふへにて付添出て來りヲ、そこにいるのゝ鉄壁の丑松のヲ、梶岡の文藏様ゝと是より播州三木の一ッ柳主斗頭さまの家來里見武左衛門といふ侍の娘お戈とヤ女ふ身共ぞつてん執心その女ゝ當時此深川仲町で若野といつて藝者のつとめ又二宇吉光の刀をぬそとり五十兩よ質入おし刀ふんしつの科よて武左衛門よ切腹させし事どもせりふ有つて若野と助三郎ゞ中をたち身どもよとりもてと丑松請人よたれむ兩人うゝあい唄よ成りとあゝ待合へ入るやとり右の唄よて向ふより下駄の歯入り與平次世話親のこしらへよて荷をかつき出來りよしを張りより茶屋女下駄を下ゞ出ておまへのくるをまつていたといふせりふ有つて下駄の歯入りをたのむ是にて荷を御し歯入りに懸るさわれの鳴物ゞ聞ゆるもへ與平に思入有つてァ、たいそうにさわぎおる

編集者　日本橋區本石町四丁目五番地　山田常次郎

出版人　本郷區湯嶋壹丁目拾八番地　齋藤長吉

明治十二年九月三日御届